

査で痙攣が誘発された症例はなく、過去の報告とやや異なるようにも思われ、また成因を考える上でも注目すべき点かもしれないと考えている。またこうした例では造影剤により常に痙攣が誘発される訳ではなく、この点でも興味を持たれた。

### 3. 発作の症状として、視覚失認様症状をも呈した症候性てんかんの一例

岸田 興治・小林 啓志 (信楽園病院)  
皆川 信 (脳神経外科)  
堀川 楊・野田 恒彦 (同 神経内科)

左半身の強直間代発作を呈し、それに伴って出現した左半側空間失認、視覚失認、半盲など右頭頂葉症状が遷延し、1カ月後後遺症を残さず治癒した特異な1例を経験した。

症例(03-3178-5) 57才、女性。

既往歴: 47才、糖尿病に気づかれ、56才から経口糖尿病剤で加療されコントロール良好。

現病歴: S 59年に12月からS 60年2月にかけて、風景が白っぽく見え、よく分る道を誤ることがあったと、今回の発作後、想い出している。

S 60年9月6日、内科外来受診時呆然とし、不安を訴える。9月13日、立位、坐位で左へ倒れる。左下肢のふるえに気づく。9月17日意識減損を伴って、頭・体が左へ回転する発作が頻発。この時、左半盲、左半側空間失認、左麻痺があわせて出だし、入院。

EEGで右頭頂葉を中心に棘波が頻発。CT像では、軽いびまん性のcontrast enhancementが同部にあった。脳梗塞による二次性複雑部分発作を考え、Urokinaseの点滴静注と、DPH、PBの経口投与を開始した。

9月20日より左半身に強直間代発作が頻発し、左片麻痺、半盲、空間失認が持続性となった。9月23日発作重積となり、Diazepamの持続点滴、副腎皮質ステロイドを併用し、発作は消失した。左片麻痺と頭頂葉症状はその後遷延したが、予期に反し、CT上、低吸収域はついに現れず、9月24日以後は、皮質の軽度のcontrast enhancementも消失した。描画時、左半分が完全に欠け、構成行為も拙劣であった。

10月5、6日、人が立っている、点滴の水が飛び散るなどの幻覚があり、もうろう状態となった。

10月8日、急に意識が清明となり、発症以後、それ以前の記憶はほとんど欠落していた。軽い構成障害をみとめたが、左半側空間失認も半盲も消失した。10月18日に

はまだ右前方に散在していた棘波も11月上旬には全く消失し、臨床的にはほぼ正常化した。

複雑部分発作に伴って出現し、約20日間にわたり遷延したこの頭頂葉症状は、脳血管写、脳シンチ、CTスキャンなどから、脳梗塞やその他の病変による巣症状とは考え難い。59年12月より一過性に視覚、地誌的障害をみたことから、右頭頂葉皮質に小さい脳梗塞があった可能性はある。それを焦点とした症候性てんかん後のToddの麻痺に類する機能障害が遷延したのか、頭頂葉症状それ自体も持続性部分発作の症状として把えることは出来ないのか。諸兄の御教示を願いたい。

### 4. Atypical benign partial epilepsy of children (J. Aicardi) の2例

笹川 陸男・長谷川精一 (国立療養所 寺泊病院)

小児に見られる部分てんかんのうち、シルビウス発作と脳波上C、mTに焦点を示し、予後良好なてんかんとして、Benign epilepsy of children with centrotemporal foci (BECCT)が知られている。この一群のなかで、必ずしもbenignでなく、一時期、難治経過を辿り、シルビウス発作に全汎発作を合併するという点で非定型の一群があり、これをAicardiは、Atypical benign partial epilepsy of childhood (ABPEC)と呼んだ。

今回非定型像を示す2症例を経験したので報告する。

症例1: 8歳男子。熱性けいれんの家族歴あり。軽度の精神発達と言語発達の遅延を認めた。IQ 72(鈴木ービネー)。4歳10ヶ月、シルビウス発作が初発し、5歳より治療開始。シルビウス発作はまもなく消失したが、非定型欠神発作が頻発した。レンノックス症候群と診断され、多剤併用となり、その副作用のため眠気が強くて日常生活に支障を来していた。昭和60年7月、発作の抑制と薬剤の調整の為、当院に入院。6種類の抗てんかん薬をVPA、PHTの2剤まで整理して、発作が消失し、副作用もなくなったので、退院となった。

症例2: 7歳女子。熱性けいれんの家族歴あり。言語発達軽度遅延。3歳6ヶ月、全身性のけいれん発作初発し、すぐに治療が開始された。3歳8ヶ月シルビウス発作が1~3回/週の頻度で出現。4歳になると、この発作は消失したが、全身性のけいれん発作は抑制されずに1~2/年の頻度で起こっていた。睡眠脳波で高度の異常が見られたためか多剤併用となり、授業中眠ってばかりいた。昭和60年7月、薬剤の調整を目的に当院入院となっ